

## 平成24年度 教師海外研修 研修報告書

派遣国：タンザニア

学校名：相模原市立鶴の台小学校

担当：5学年担任

氏名：大村 伸

### 1. 今回の研修における目的やねらい

開発途上国の現状を子供へ伝えるための手段は様々あるが、生の声に勝るものはない。自分が体験したことには説得力があるからである。本やインターネットには載っていない、体験した者だからこそわかる何かを見つけ、それをもとに開発教育の教材を作ることがを目的にこの研修に臨んだ。

この目的のもと、ねらいを以下の3つにした。

一つ目は、教師がタンザニアにいるからこそできる授業を試みる。具体的にはネット環境が整っていればスカイプでタンザニアと所属校の相模原を繋ぎ、交流授業をする。それによって双方の子供たちが相手の国に興味を持ち、身近に感じられると考える。

二つ目は、タンザニアで活躍する日本人を知ることである。遠い国で活躍する日本人の存在を知るとは子供たちにとって大きな刺激になると思われる。帰国後の授業により、子供たちは開発途上国の現状を知り、自分にできることは何かを考えるであろう。その時に単に募金で終わるのではなく、更に一歩進んで将来の自分の生き方を考え、こんな仕事があるんだあ、こんな生き方もあるんだあと考えられるようになってもらいたい。

三つ目は、日本を再認識することである。日本には気づかないことが、外に出ると発見できることがある。タンザニアの人と話し、外から改めて日本という国を見つめ、新たに発見したことを開発教育の教材に活かしていきたい。

### 2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

スカイプができるのか直前までわからなかったが、イリンガのネット環境が整っていることが確認でき、そのことを所属校に伝えると、夏休みであるのかかわらず、たくさんの児童が集まり、タンザニアと日本の子供同士の交流ができた。タンザニアの子どもが照れながら、「僕と友達になってくれますか?」と相模原の子どもに尋ねた場面が印象的だった。この授業をスタート地点とし、更に交流を深めていきたい。

タンザニアで活躍する日本人については、JICAタンザニア事務所の方々や道路事業の専門家の方などクラスの子供達に伝えたい日本人とたくさん出会えたが、中でも、青年海外協力隊の存在が大きく感じられた。日本から遠く離れた異国の地で、日本人の若者が現地の人と一緒にタンザニアが良い国になるように格闘しているという事実は是非伝えたい。

日本の再確認については、訪問した先々で「日本はどのようにして発展できたのか」「どうすれば日本のように発展できるか」など日本の発展についての質問を受けた。自分なりの答えはあったが、タンザニアの人や参加メンバーと話し合う中で自分の考えも変わっていき、この研修を通して、自分の国について深く考えるようになった。

### 3. タンザニアから学んだこと

人それぞれが持っている価値観について深く考えさせられた。学校の校長室や博物館など公の建物の中に大抵掲げられている大統領の写真。その額が傾いている。手を伸ばせばすぐにでも直せるのにそのままである。学校の教室は毎日掃除をしているというが、ゴミが落ち、机や机は乱れている。校内の食堂の窓が割れ、地面にはガラスが散乱している。バスターミナルは人で溢れ、並んでいる人はいない。バスが来ると人々は駆け込む。日本人の価値観からすると雑然としていて秩序が欠けているように見え

るが、タンザニアの人にとっては、そこに価値を置いていないからではないだろうか。「並ぶ」という行動を考えると、日本人は並べばいずれ自分の番になるというメリットがあるから並ぶのである。しかしタンザニアでは並ぶメリットが意識の中に存在していないだけなのかもしれない。ンゴメ小学校を訪問した際、歌や踊りの歓迎セレモニーの後、大きな部屋に案内されてお茶や軽食を頂いた。時間が押していたので、こちらはその後の予定の事を気にしていたが、ンゴメの先生方はこのお茶の時間を大切にしている。いわゆる「カリブ精神」である。どんな時に幸せを感じるかという質問に対して「このように人をもてなす時」と答えていた。「時間」を気にする日本人と「カリブ精神」を大切にするタンザニア人との違いである。このように考えると、クラスの子供にタンザニアについて伝える時はこの「価値観の違い」もあわせて伝える必要があると強く感じた。目に見える違いだけを子供たちに伝えても、本当の国際理解にはならない。むしろ日本人の価値基準によってタンザニアがネガティブに伝わってしまう危険性がある。

#### 4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

2学期以降、今回の経験を自分のクラス・学年に伝え、タンザニアのこと、そこで活躍する日本人のことを知り、自分の生き方を考えるような授業を展開していきたいと考えている。また、今回スカイプを利用してタンザニアと相模原の子供が交流できたので、この一回で終わらせるのではなく、引き続き交流し続けたいと思う。

また、今回、タンザニアに来て「価値観の違い」というものが強く心に残っている。これは対タンザニア人だけでなく、日本人同士でもよくあることである。他人とコミュニケーションをとる場合、相手のバックグラウンドを知り、その相手の価値観を理解することが大切である。このことは開発教育、国際理解教育だけでなく教育活動全てに関係することである。

#### 5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

学校現場やその関係機関など一般の個人旅行では、見ることができない場所を訪れ、子供と交流し、現場の声を聞いたことがこの研修の最大の魅力である。また、同じ志を持ったメンバーが集まっているので、話し合いでも意見が活発に出て、その話し合いの時間も自分には大きな財産になった。改善点としては、国内の事前研修で、海外研修についての連絡調整をする時間をもう少し取りたかった。交流をどうするか、お土産は何にするか、誰が用意するか、一学期中にクラスの児童とともに準備する事を考えると遅くても6月中に決めておいた方がスムーズである。

#### 6. その他、研修全般を通じての感想・意見など

アフリカなんて一生に一度行けるか行けないと思う位、距離的にも遠く、意識の上でも遠い存在の国であったが、そうではなかった。勝手に自分の中で「遠い国」にしていただけである。確かに日本人とタンザニア人では違うところがある。しかし、似たところも多い。シャイなところ、正直なところなどはよく似ている。「世界はどこでも一緒、むしろ壁を作っているのは大人」最終日、JICAタンザニア事務所の方の言葉である。クラスの子供はタンザニアをどう思っているのか。おそらく「遠い国」と思っている子が多いだろう。しかし、それは我々大人の先入観からではなく、単なる知識の少なさからであろう。

2学期、子供の前で何を話すか、その内容によって、「遠い国」にも「近い国」にもなる。責任重大であるが、楽しみでもある。ンゴメ小学校の子供が「僕と友達になってくれますか？」と言ったのに対して相模原の子供は「YES」と答えた。その言葉が社交辞令にならないように授業をしていきたい。

#### 7. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど

**提出期限：平成24年8月16日（木）**

まず、第一に体調管理である。事前に言われていた通り、水道水や生野菜を口にしないということは徹底していたが、イリングで腹痛に襲われた。明確な理由はわからないが、研修後半に入り疲れが溜まっていたからであろう。研修期間中だけでなく、研修前から体調管理に気を付け、体力を付けておく必要がある。

次にテーマ設定についてである。2学期以降、授業を行う際のテーマを自分の中で持っておくと、素材を集める際に、あれもこれもとならずに済む。しかし、実際には、現地に行くと新しい発見がたくさんあり、テーマが変わる場合もあることが考えられる。したがって、そのテーマも大まかなもので良いと思われる。

**8. 各訪問先等の所感**

日 時	テーマ	所 感
7月29日(日)	日本からタンザニアまでの移動中および現地到着	空港からホテルまでの道中、建設中のビル・路上駐車、舗装された道路など目に入るものが日本とあまり変わらず、知ってはいたが、やはり拍子抜けしてしまった感じであった。
7月30日(月)	JICAタンザニア事務所表敬	貧困がテロを生む。援助はテロの原因となる貧困をなくすため。世界のためすることが、いずれ日本のためにもなる。勝田所長の話から援助を行う目的とは様々であることがわかった。
7月30日(月)	本日の振り返り	路上で生活用品を売る人がたくさんいる中で、仕事をしていない成人男性も多いように思われた。バスの中から見ただけなので、早くこの国の人と話してみたいと感じた。
7月31日(火)	JICAタンザニア事務所研修ブリーフィング	教育・道路・水セクターの話聞いた。特に教育セクターでは、教師不足や教師の質、都市と地方の格差、進学率の低さなど課題が山積しているように感じられた。事前に隊員からも同様の話を聞いていたので、自分の目で確かめたい。
7月31日(火)	市内視察（教材購入）	実際に街に出て、ローカルなレストランで食事をしたり、本屋で現地の人と会話をしたりしながら、教材を購入するなど楽しい時間であった。買い物の際、値段を吹っ掛けてこないところが、タンザニアらしいように感じられた。
7月31日(火)	本日の振り返り	参加者同士、印象に残ったこと、驚いたこと、疑問に思ったことを話し合った。他の人の感想を聞くことによって授業の核となるものが見つけられそうで、有意義な時間であった。
8月1日(水)	ミクミ国立公園、タンザム幹線道路改修計画	野生動物が見られたらラッキー程度に思っていたが、象、キリン、シマウマ、水牛、鹿、サルなど間近に見ることができ興奮した。また、長時間の移動であったが、路面状態も良く、快適であった。

## 提出期限：平成24年8月16日(木)

8月1日(水)	イリンガ隊員との懇談	イリンガの街に着き、バスを降りた瞬間、ダルエスとの気温の差に驚いた。夕食を取りながら隊員といろいろな話ができた。自分よりも若い隊員が高い志を持って、遠い異国の地で活躍していることを知り、明日からの学校訪問が楽しみになった。
8月2日(木)	クレルー教員養成学校 横山隊員	養成学校の生徒とグループ討論を行った。「どうすれば日本のように発展できるのか」今回の研修で今後何回も聞かれるこの質問に初めてここで出会った。適当な答えを言うことができなかった。そもそも日本を手本にすべきか疑問である。
8月2日(木)	イフンダ中等学校 幾山隊員	中等学校の職員の皆さんに丁寧なおもてなしを受けた。これが「カリブ精神」なのかなと感じた。ここでもまた「日本の発展」について質問うけた。2回目なので自分の中でもだんだん答えが固まってきた。
8月2日(木)	本日の振り返り	タンザニア人と接する機会が増え、今回の振り返りでは「タンザニア人とは」という意見がたくさん出た。 ・和を大切にする ・自分の気持ちを伝えるのが苦手 ・疑われない人種 ・反核家族的な考えなどである。
8月3日(金)	ンゴメ小学校 谷村隊員	敷地内に入るなり、たくさんの子どもが駆け寄って来てくれて、歓迎セレモニーでは歌や伝統的な踊りを見せてくれて感激した。交流授業ではスカイプを利用し、相模原とイリンガが繋がったことがうれしかった。タンザニアの子どもは全体的にシャイだが、「僕と友達になってくれますか？」と相模原の子どもに尋ねた場面が印象的だった。
8月3日(金)	コミュニティ訪問	この地域の議員さんと診療施設や共同井戸を視察したが、自分たちの力で自分たちの街を良くしていこうという気持ちが感じられた。
8月3日(金)	Mkwawa 博物館	複数の民族が共存している国で、それぞれ自分の民族を誇りに思い生きている様子が、この博物館視察での解説で感じられた。自分の民族を意識しながら、他民族を受け入れる考え方が、この国の良いところである。
8月3日(金)	イリンガ市内視察	市場でバナナを売る女性に「写真を撮っても良いですか」と聞くと「貧しさが広められるから嫌だ」と断られた。しかし、その横では同じような格好の女性が携帯でメールをしている。携帯がこの国に何をもたらすのか気になった。
8月3日(金)	本日の振り返り	傾いた大統領の写真、校内の割れた窓、人で溢れたバスターミナル。日本人の価値観からすると雑然としていて秩序が欠けているように見えるが、タンザニアの人にとっては、そこに価値を置いていないからではな

提出期限：平成24年8月16日（木）

		いだろうか。
8月4日(土)	地方道路開発技術向上プロジェクト視察	開発途上国における道路の必要性、そしてLBTという手法を、地方の村の現状を見て、村人と話をすることによってわかった。水道より電気よりも道路が必要という村人の意見には説得力があった。
8月4日(土)	専門家との懇談	道路を作ることが目的ではなく、道路を作るシステムを構築することが第一の目的であるという話が印象的であった。同時に農閑期に労働者を集める際、豊作時はあまり集まらないという話を聞き、この国にこのシステムが合うか疑問が残った。
8月4日(土)	本日の振り返り	イリング隊員にガンギロンガという街を一望できる岩山に連れて行ってもらった。娯楽のないこの街では若者のデートスポットであるらしく、タンザニア人のカップルも来ていた。そこから見える町並み、夕日は最高で、改めてイリングという街が好きになった。
8月5日(日)	イリングからダルエスサラームへの移動	空港に初めて降り立った時よりも、イリングという地方を経験して、都会に戻ってきたこの時の方が、人の多さ、建物の高さなどダルエスの都会の様子が新鮮にそして印象的に感じられた。
8月5日(日)	本日の振り返り	振り返りも終盤になり、今回の研修で感じたことをどう授業に活かしていくか、考えなければならない段階であるにもかかわらず、まだ授業の柱が決まっていないことに焦りを感じた。
8月6日(月)	首都圏周辺地域給水計画視察	JICAの援助で建設した有料の給水施設のお陰で安全な水が確保され、以前と比べ病気が減ったという話がある一方で、近くに不衛生だが無料の井戸があるとそれを利用する人がまだいることに、水セクターの山本さんがブリーフィングで言っていた「衛生意識の低さ」を強く感じた。
8月6日(月)	JICA タンザニア事務所 討論会	発展とともに生じるであろう国内格差をどうすべきか、これは日本にも言える共通の問題である。開発援助、開発教育を考える際、対象国だけでなく、自ずと自国について考えてしまうものだということがわかった。
8月6日(月)	教材購入	いわゆる観光客向けの土産物店、レストランに行った。店内は欧米人が多く、商品やメニューの単価もローカルと比べ割高である。整った店内やサービスに久しぶりの安堵感を覚える一方、舗装道路や電気、水道がないイリングで会った村人のことを考えると複雑な気持ちになった。
8月6日(火)	本日の振り返り	給水施設視察の時、予定外で近くの小学校を見学させてもらった。給水施設の会計係の女性は、「水道や電

提出期限：平成24年8月16日(木)

		<p>気を家に引くよりも学校や診療所の設備を充実してほしい」と言っているだけあり、見学した小学校のトイレはとても原始的だった。ダルエスという都会でもこのような状態であるということに驚いた。</p>
8月7日(水)	JICA タンザニア事務所 研修報告会	<p>「世界はどこでも一緒、むしろ壁を作っているのは大人」「格差を身近な問題として一緒に解決していくように」「この人達と一緒に生きていきたいと思えるようになってほしい」「違うことより同じことを伝えることが大事」我々が帰国後、日本の子どもにもタンザニアのことをどのように伝えるか。とても参考になる言葉をタンザニア事務所の方々から最後にもらった。</p>
8月7日(水)	在タンザニア日本大使館表敬 訪問	<p>ダルエスで多く見掛けた失業者は地方出身者が多く、彼らは田舎に戻れば土地もあり、飢えることはないという話を岡田大使から伺った。国民は発展を望んでいると言いつつ、街にいる失業者の様子を見ると本当に援助が必要なのか考えてしまう。タンザニアの人々はそこそこハッピーなのに、先進国が身の丈に合わないことを開発途上国にやらせて、ついてこれないのが今の援助の問題点なのかもしれない。大使の話聞き、改めて援助の難しさを感じた。</p>
8月7日(水)	本日の振り返り	<p>いよいよ帰国である。充実した研修ができたのもこれまで全行程同行して頂いたタンザニア事務所の足立さん、そしてイリングガでお世話になった隊員の方々のお陰である。また、このメンバーだったから中身の濃い話し合いができたと思う。一緒に参加したメンバーに感謝の気持ちでいっぱいである。</p>
8月8日(木)	タンザニアから日本までの移動中および日本到着	<p>着陸直前、関空上空から日本の町並みを見た。山の尾根を送電線が張り巡らされ、道路は整備され、住宅がきれいに並び、全てが整っていた。普段、海外旅行から帰国すると、単に「日本は整っているなあ」程度の感想なのだが、今回は「資源のない小国がどうやって？教育の力？政治システム？国民性？・・・」などなどいろいろ考えてしまった。子ども達に今回の経験を伝える際は「タンザニアとは」だけでなく「日本とは」ということにも考えが及ぶような授業をしたい。</p>